
RICHART STRAUSS
ABEND
1 DECEMBER 1978



河地 良智

1945年生まれ。国立音楽大学器楽科を経て、桐朋学園大学指揮科に学ぶ。指揮を斎藤秀雄、秋山和慶、ホルンを千葉馨、和方寛茂、ピアノを原口歌子の各氏に師事。

1973年、第３回民音指揮者コンクールに入選、奨励賞を受賞。

1974年、バンクーバーのサマー・スクールに講師として招かれたほか、ヨーロッパ演奏旅行を行い、帰国後、二期会東京公演、Ｎ響定期演奏会などの副指揮者として活躍。その後、札幌交響楽団、群馬交響楽団、桐朋学園大学、洗足学園大学、東京混声合唱団、二期会などの各オーケストラ、合唱団の指揮台に立つ。

1977年８月、イギリスのアバディーン音楽祭に出演し成功を納める。

1978年８月、慶応ワグネル・オーケストラを率いて、スイスのルッツェルン800年音楽祭に参加したほかヨーロッパ各地を演奏旅行。11月、東京室内歌劇場定期公演でイベールの歌劇「アルジェリック」を振り好評を博す。

新響団員の信頼は厚く、1977年からは『新響指揮者』として音楽監督芥川也寸志と並び演奏会に登場し、いまや新響になくてはならない人となった。活躍の期待される若手指揮者である。

新交響楽団

1956年３月創立。会社員、主婦、教師、学生など様々な職業を持つアマチュアのプレーヤー、110名程で構成されているオーケストラである。

創立以来、音楽監督芥川也寸志の献身的な指導のもとに、ソビエト演奏旅行の他、九州沖縄等の国内演奏旅行、ベートーベン・チクルス、ストラビンスキー３部作一挙上演等を行なった。1976年には創立20周年記念演奏会として「日本の交響作品展」と名付けた２夜にわたる演奏会により、第８回鳥井音楽賞を受賞。演奏、企画、運営において最高水準のアマチュア・オーケストラをめざしているが、困難な問題を多数かかえている……。

当夜の演奏やいかに。





都河 和彦

1943年生まれ。バイオリンを篠崎弘嗣氏に師事。東京大学法学部に在学中、同大オーケストラの欧州公演にコンサートマスター兼ソリストとして参加。卒業後、外資系石油会社入社と同時に新響へ入団。以後コンサートマスター、技術委員長として活躍。本年第81回演奏会で小倉朗のVn協奏曲のソリストをつとめ好評を得た。

チェロ・パートの都河明子さんは夫人である。

新交響楽団　第82回演奏会

リヒャルト・シュトラウスの夕べ

日比谷公会堂
1978年12月1日（金）
午後7時

指揮　河地良智

1　交響詩「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら」作品28
“Till Eulenspiegels Lustige Streiche” Op. 28

2　楽劇「サロメ」より　7つのベールの踊り
“Tanz der Sieber Schleier”

3　交響詩「英雄の生涯」作品40　バイオリン独奏 都河和彦
“Ein Heldenleben” Op. 40

Ⅰ　英雄 Der Held
Ⅱ　英雄の敵 Der Helden Widersacher
Ⅲ　英雄の伴侶 Der Helden Getährtin
Ⅳ　英雄の戦い Der Helden Walstatt
Ⅴ　英雄の平和な仕事 Der Helden Friedenswerke
Ⅵ　英雄の隠遁と成就 Der Helden Weltflucht und Vollendung

リヒャルト・シュトラウスの二つの交響詩

クロード・ドビュッシー

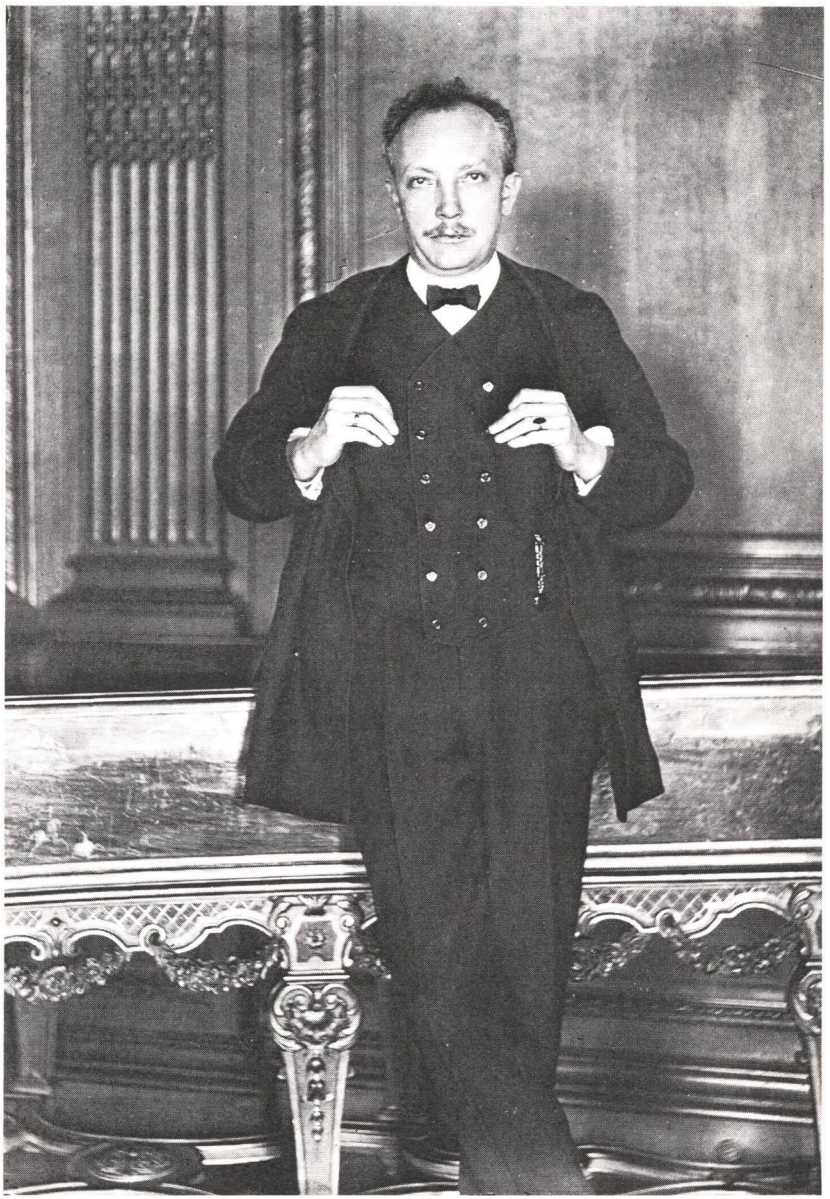
『美しき青きドナウ』の作曲者とは、まったく何の血のつながりもない人である。彼は1864年、ミュンヒェンで生まれた。彼の父は王立室内楽団の団員だった。リヒャルト・シュトラウスこそ、若いドイツのほとんど唯一の独創的音楽家だ。彼はオーケストラ指揮の卓抜な腕前からすると、リストの後継というべきだが、また同時に文学を音楽の支えにしようという気組みからすれば、わがベルリオーズの後継ともいえるだろう。彼の交響詩の表題がそのことをよく証明している――『ドン・キホーテ』『ツァラトゥーストラかく語りき』『ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら』。この最後に挙げた交響詩では、音楽が語ろうとしているのがどういう場面かということ、オーケストラが何かもとのテクストの気ちがい染みた挿絵にも比べうるものとして提示するのがどういう情景かということが、聴いていると手にとるようにわかるほどだ。そんなわけで、この曲ではクラリネットが気が狂ったような放物線を描き、トランペットが栓のつまったような音をたてつづけ、今にも出そうなくしゃみに気づいたホルンがあわててトランペットに向かって「お望みのままに（くしゃみのおまじない）」と丁寧に応ずる。がらがらの音が芝居小屋の馬鹿さわぎの物音にもかき消されずに響いているあいだ、大太鼓（クレッセル）が道化役者の足踏みを強調するかのようにドォーン、ドォーンと音を立てている。リヒャルト・シュトラウス氏の芸術がいつでもこんなふうに幻想的と限ってはいないが、それでも明らかに彼は映像によって考えているし、頭の中にあるものをデッサンするのに彼はオーケストラを利用しているようである。これは今までにほとんど使われたこともない桁外れの処理法である。そればかりか、リヒャルト・シュトラウス氏はまったく個性的な楽曲展開を可能ならしめる方式をこういうやり方のうちに見つけている。もはやこれはあのバッハ、ベートーヴェンの厳格で建築的なやり方ではなくて、リズムと音色に基づく展開というべきものだ。彼は驚くべき冷静な手つきで、気も遠くなるほど相隔たった調性のあいだにつなぎをつけてしまう。それらの調性が「心を引き裂く」ような性質をもちうることなどには一切頓着なしに、ただ「活きいきした感じ」だけがあらわれるように工夫できるほど冷静なのだ。

以上のような特性は『ある英雄の生涯』において極点に達している。通俗性というか、誇張されたイタリア趣味というか、それをさらに気取りで飾ったような楽節の冒頭には、私の好みに合わぬところはあるが、やがてほどなく独特の驚異的なオーケストラの多彩が、われわれの心を思いのままに、長い時間にわたって引っかきまわす。やがて痙攣的な動きがきて、たちまちわれわれをとりこにしてしまう。自分の感情を抑制するだけの力が、われわれにはもうなくなっている。この交響詩が、この種の演奏に普通な時間の限度を越えていることさえ、われわれは気づかない。

もう一度いうが、これはいわば絵本であり、もっと思い切っていえば、映画的手法に基づいているとさえいえるだろう。だが、これほどの作品を、これほどの持続的な努力によって構築した人物には、天才という名がほとんどふさわしいといわねばならない。

（作曲家）

リヒャルト・シュトラウス(ロンドン滞在中) 1903年

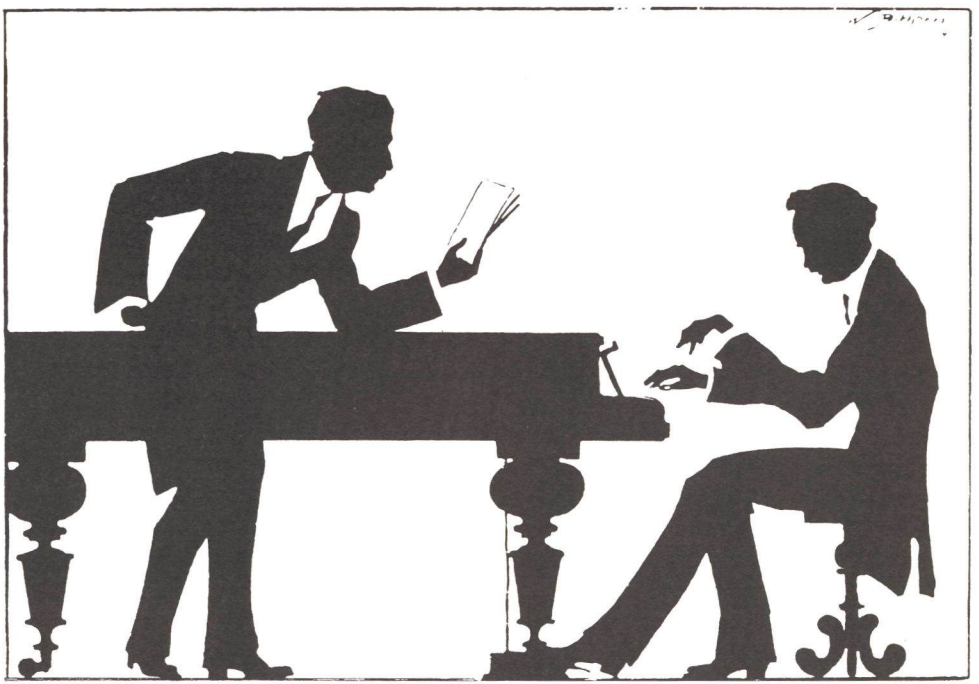




シュトラウスの生家の前の河地良智(1978)



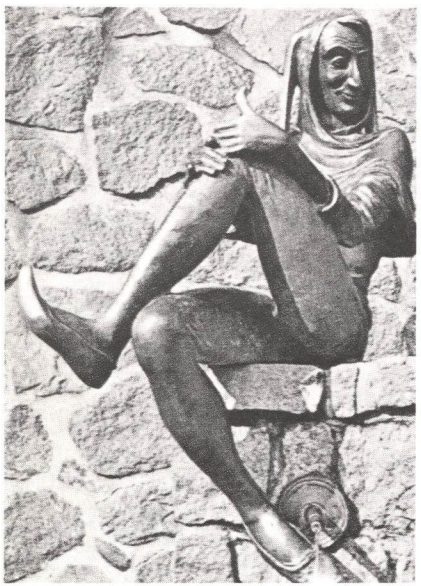
ワイマール時代のシュトラウス(1892)



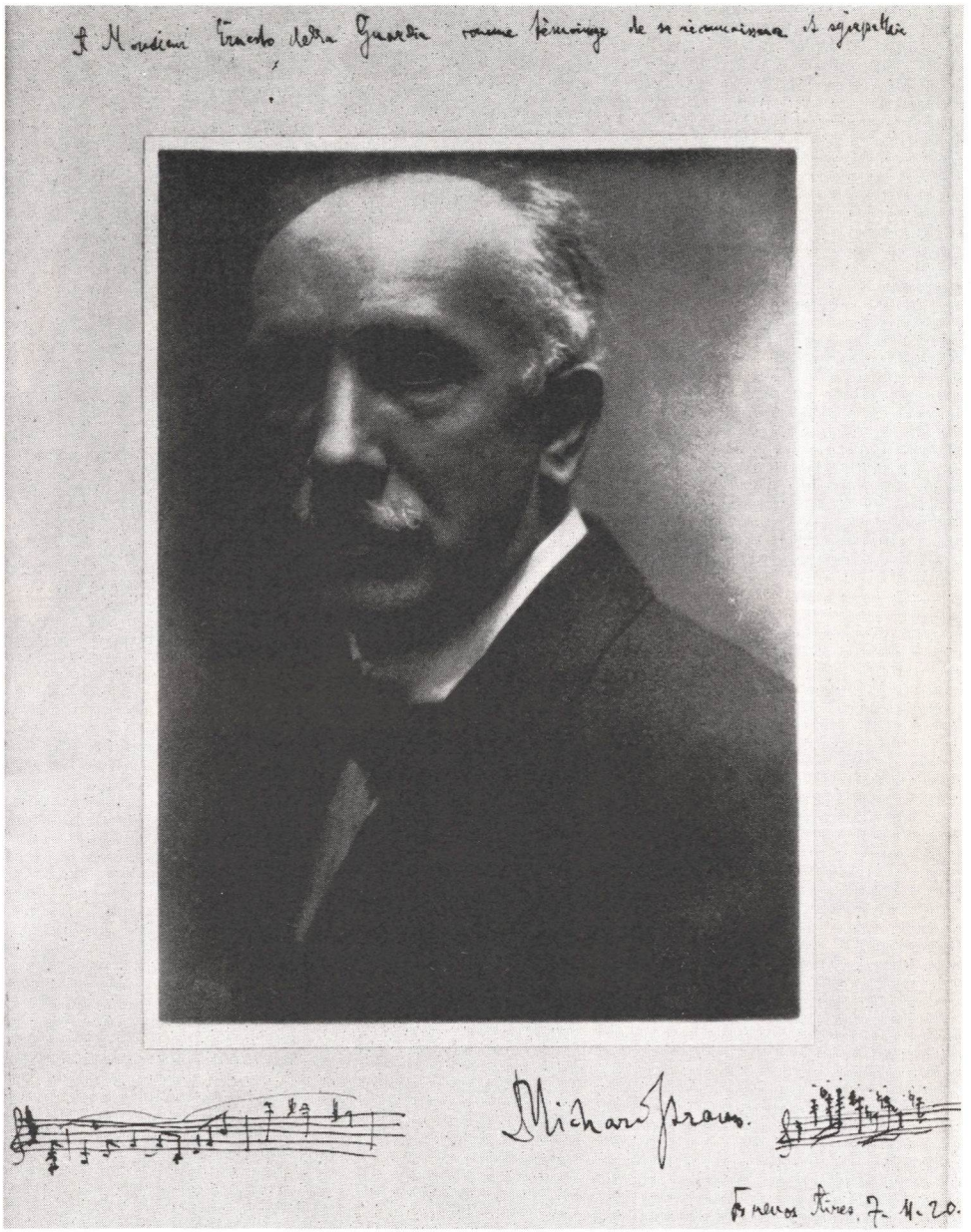
ホフマンスタールとシュトラウス



39才のシュトラウス



ティル・オイレンシュピーゲルの像



シュトラウス(1920)と彼の筆跡、右は「英雄の生涯」
の批評家のテーマ、左は「家庭交響曲」の父親のテーマ



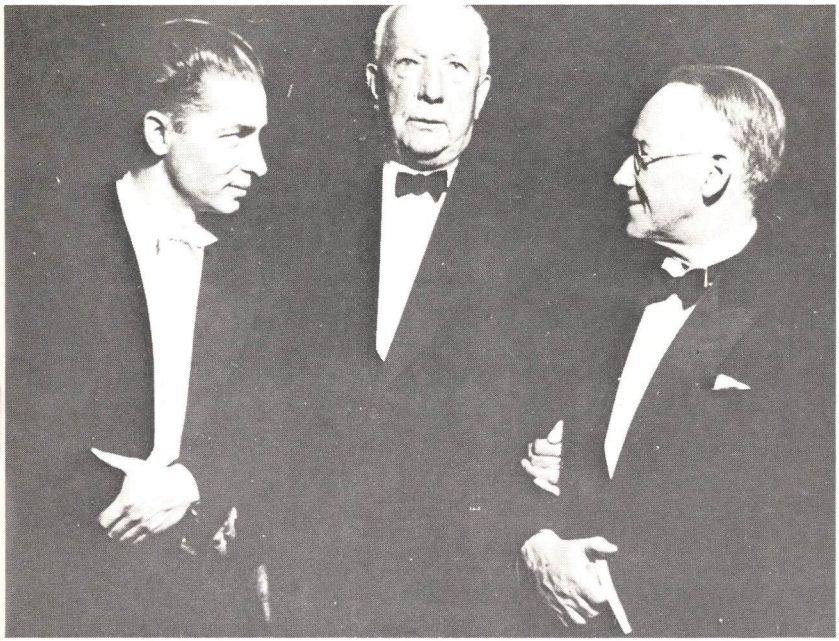
R・シュトラウス(1925)



妻パウリーネ、孫と共に(1929)



アルプス交響曲を指揮するシュトラウス ―ウィーン― (1942)



ベルリンにて(1942) 左は指揮者ヘルベルト・フォン・カラヤン



ロンドンにて(1947) 左は指揮者クレメンス・クラウス



フィルハーモニア管弦楽団を指揮するシュトラウス(1947)



初めて飛行機に乗った83才のシュトラウス

解説

シュトラウスの交響詩

世紀末から20世紀の前半にわたって、長い芸術家の生涯を、たえまない変転のうちに過したリヒャルト・シュトラウス　1864～1949　は、まずなにはともあれ交響詩作家として知られている。僚友グスタフ・マーラーが、その内心の歌を、まずなによりも伝統的な交響曲形式の枠（たとえその枠をやぶろうとする意欲をもち、時として打ちやぶってはいるとしても）のうちに歌い上げたのに対して、彼は、ロマン派時代にはじめて出現した新しい交響詩のジャンルを、みずからの芸術的表白の手段としたのであった。そうしたジャンルとの密着が、シュトラウスの芸術家としての性格を雄弁に物語っている点は、疑うべき余地もあるまい。マーラーを内向的な存在として把えることが可能だとすれば、シュトラウスは、まさに正反対な外向的性格の持ち主であった。この基本的な態度から、彼の芸術の根本的な、本質的な特徴も明らかとなるだろう。シュトラウスが、とくに力を注いだジャンルとしては、交響詩のほかに、歌劇 楽劇の領域がある。これらは、本質的な意味で、ドラマ的な音楽なのだが、シュトラウスの音楽の‘ドラマ’としての性格は、なにも、この二つのジャンルだけに限られるものではない。ロマン・ロランも、この点を指摘して、シュトラウスの音楽には、いたるところにドラマが見出されると語っている。いたるところというのは、‘ドラマ’が、歌曲作品や絶対音楽の中にもみられるからなのである。

だが、このように考えた場合、シュトラウスの‘ドラマ’とは、いったいなんなのかをはっきりとさせておく心要があるだろう。もちろん、マーラーの作品の中にも、ある種の‘ドラマ’が見出されるからである。シュトラウスの‘ドラマ’とは、まさしく私たちの視覚に訴えかけるかのような行為としての‘ドラマ’なのだ。たとえば交響詩を例にとってみよう。彼が書いた交響詩は、そのほとんどすべてがひとりの主人公を持ち、その主人公の外面的な行為であれ、内面的な形姿であれ、それが刻明に描かれるのである。すなわち、さまざまな意味での芝居が、音を介して、音によって描かれるのであり、あるいは芝居がじっさいに演じられているといってもよい、アンドレ・クーロワは、なかなかうまいことをいっている。‘彼は俳優である……芝居は彼の血の中に染みこんでいる。彼が書くものはみんな、たとえ、舞台上で演じられるものではなくても、芝居なのである’。



シュトラウスが作曲した交響詩の作品は、1886年に作られた交響的幻想曲「イタリアより」を含めず、また交響曲となづけられた２曲、すなわち「家庭交響曲」1902～1903年,と「アルプス交響曲」1911～1915年,を省いたとしても、「ドン・ファン」1888年,「マクベス」1886～1890年,「死と変容」1889年,「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら」1894～1895年,「ツァラトゥストラはこう語った」1895～1896年,「ドン・キホーテ」1807年, そして「英雄の生涯」1898年と７曲にものぼっている。とすれば、そこにひとつの発展のカーヴがみられないはずはない。もちろん、真の交響詩としてのはじめての作品「ドン・ファン」にも、たくみな形式感や色彩感、リズム感に裏づけされたシュトラウスの見事な技術が露わとなっているが、彼は、以後の10年間に、まことにめざましい発展のあとを、技術面でも、またそれにもとづいた表現の面でも示すことになるのだ。しかも、表現内容の多様さも、はなはだ驚嘆すべきひろがりをみせている。

交響詩「ティル」の誕生と初演など

1889年、シュトラウスは、ワイマールで、ドイツの作曲家キストラーが作曲した歌劇「オイレンシュピーゲル」を知り、ひじょうな刺戟を与えられ、自分でも同じ題材によってオペラを作曲してみようという気持にとらわれた。その目的で、彼は台本を書きはじめたが、この試みは１幕で中絶してしまい、加えて、勢いこんで作曲した歌劇「クントラム」も失敗するに及んで、シュトラウスは、この自作の台本を基にして歌劇を書きあげようとする考えをとうとう放棄したのだった。だが、このオペラの主人公となるはずだった愉快ないたずら者ティル・オイレンジュピーゲルの存在は、芸術家としての彼によほど強烈に印象を与えたものらしく、彼はしばらくすると、この人物の音楽的な肉づけを、全然別の形でおこなうこととなった。それが交響詩「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら」で、副題としては「むかしの無頼の物語により、ロンド形式で、大管弦楽のために書かれる」と但し書がついている。このサブタイトルからもわかるように、ティル・オイレンシュピーゲル ウーレンシュピーゲルともいうは、14世紀の実在人物で、フランドルからドイツ北西部を股にかけ、威勢のよい放浪生活をおくった無頼の徒であり、1350年に伝染病にかかって死んだと伝えられる。ティルの奇行はひじょうに有名で、1515年ごろから数多くの物語り本の主人公として登場し、民衆の間での人気者だったといわれる。シュトラウスの交響詩でも、この人気の無頼者ティルが巷間でおこなった数かずの悪戯が取りあげられいきいきと描かれるのである。

作曲が完了したのは、1895年５月6 日、場所はシュトラウスの故郷の町ミュンヘンであった。シュトラウスが、まだわずか37才の時のことである。そして初演がおこなわれたのは同年11月５日で、場所はケルン、ギュルツェニヒ国立管弦楽団の演奏だったが、

この時の指揮者は「コールユーブンゲン」として日本でもはなはだ有名な合唱教本である「ミュンヘン音楽学校合唱練習書」の編集者として知られるフランツ・ヴュルナーであった。なお、出版はペテルス社からおこなわれ、のちにウニヴェルザール社からも出版された。小型総譜にも、フィルハルモニアやオイレンブルク等がある。なお、このすぐれた交響詩の献呈を受けたのは、ミュンヘン生れでシュトラウスより1年年長の音楽評論家アルトゥル・ザイドゥルであった。

この交響詩が初演された翌年、友人のフェルディナント・フォン・シュポルク伯爵が、彼のためにこの題材を使って台本を書き、彼も大いに興味を唆られたが、新たに歌劇を作曲するまでには至らなかった。

「ティル」の特徴

さて、この交響詩の形式は、副題からも明らかなように、ロンド形式によっており、シュトラウスは、古典派から受けついだ確実な技法で、たくみな処理をおこなっているが、主題主題から派生したさまざまな変型やゆたかな副主題などを加えて、はなはだ多彩な趣きを示している。シュトラウスは、初演をおこなったヴュルナーに対して、以下のように書き送っている。「私には『オイレンシュピーゲル』のプログラムを書くことは不可能です。というのは、私が個々の部分で考えをめぐらしたことは、言葉で表わそうとするとはっきりわかることはまずないばかりでなく、つまずきにさえなるかも知れないからです。そこで、今度は、聴き手自身に謎を解いてもらうことにしましょう」。こうして彼は3つの主題だけを指示するにとどめている。それはまず (1)冒頭のプロローグの旋律で「昔、ひとりのいたずら者がおりましたとさ」つづいて (2)主人公ティルをあらわす2個の主題、そして最後に(3)「死」の動機、以上である。これ以外は、聴き手の自由な解釈に任せられるわけである。しかしながら、その彼が他方では、曲中にかなり細かい指定をおこなっていることもよく知られている。それはシュトラウスが、さる解説家に与えたといわれるもので、動機や主題に、ひとつひとつ詳しい名称がつけられているのである。

この交響詩は、初演で大成功を収め、その後も20世紀後半の今日にいたるまで、たえずオーケストラの演奏会のプログラムを飾ってきた人気者となったが、それはこの曲が持っている内容的な面白さと形式的な巧みさ、さらに機知に溢わんばかりの管弦楽の色彩的な豊かさなどが、音楽的な諧虐の理想的な形にまでみごと統一されているからであろう。



楽劇「サロメ」について

楽劇「サロメ」は、シュトラウスが、「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら」や「ドン・キホーテ」などの交響詩を発表した後、1905年の作品である。脚本は周知のように、オスカー・ワイルドが、1891年にフランス語で書いた同名の戯曲をもとにしている。シュトラウスは、この劇の第一行にある若いシリアトナラボートの科白「今夜のサロメ姫は何と美しいことか」から、この劇が、音楽と一緒にして楽劇を作るのに都合がいいことを感じたといわれている。

「サロメ」では、囚われた予言者ヨカナーンをサロメは愛するが、もちろん、受け入れられない。そこで、サロメは義理の父ヘロデの願いを受け入れ、「7つのヴェールの踊り」を舞い、その代償としてヨカナーンの首を貰い、その盆の上にのせられた首に念願の接吻をする。そして、恐ろしくなってしまったヘロデによって、兵士達の楯で殺される。

この楽劇では、語るような歌、心理的な描写、示導動機の使用という点で、ワーグナーの伝統が見られる。管弦楽法については、すでに、多くの交響詩で開拓された方法がここでも使われている。半音階的な筆法も、もちろん多いのだが、終止では、調性的な終止が使われているのが特徴である。

シュトラウスは、劇の流れに密接な他の部分を全て書いた後に「7つのヴェールの踊り」を作曲したらしい。主要主題は、ウィンナ・ワルツ風であって、他の個所と感じが違うし、この踊りの中にでてくる動機の選択、配列もかならずとも明確な意味をもっていない。

この曲は、今回の公演のように、独立した器楽曲としてもよく演奏される。

「英雄の生涯」という題

数多いシュトラウスの交響詩の中で、「英雄の生涯」はまた特別の意義をもった作品を形づくっている。彼は、ドン・ファンやマクベス、あるいはツァラトゥストラのように、悲劇的な、あるいは偉大な存在を描き、またティルやドン・キホーテのような存在も描きわけた。だが、「英雄の生涯」では、そうした意味での存在としての‘英雄’が表現対象となっているのではない。この‘英雄’とは、じつは、作曲家自身、すなわちシュトラウス自身のことであったのだ。しかも、彼は、ここで‘英雄’としてのみずからを、その行為、あるいは行為の対象から描こうとする。こうして、「英雄の生涯」は、他者ではなく、自己を正面から、直

接的に取り上げためずらしい交響詩作品となった。ここで、私たちは、かつてベルリオーズが、交響曲形式のうちに、自己の劇的な表現を実現したこととの関連性を否定することはできないのである。なお私たちは、この作品がシュトラウスの交響詩作品の最後に以置するものであり、その上、やがて世紀が終ろうとする1898年に作曲されたという事実にも注意を惹かれる。彼は、なお、依然として標題的な管弦楽曲を作曲しつづけていくが、それらの曲の名称や形式的な構成は、‘交響曲’であり、さらに表現対象もまた、家庭生活や自然の情景なのである。

ロマン・ロランは、シュトラウスを‘ベートーベンのあとで、英雄交響曲をふたたび書き、それでもって自ら英雄を演じる二重の大胆さをもった奇妙な羈気満々たる人物’と評した。シュトラウスが、なお標題交響曲の創作にたずさわっていたころに書かれたこの評言は、半ば当を得たものといえよう。‘英雄’の名に飾られていることには共通するものがあったとしても、両者は形式内容のいずれの点からも、まったく異質的なものだからである。しかし、シュトラウスが、みずからの生涯を、ひとりの英雄の生涯にみたてて、その芸術的な表現を、標題音楽の立場から実現しようとした点は、およそ確かであり、この点で堂々たる自信に裏打ちされた‘羈気満々たる人物’であったことは事実であったろう。

「英雄の生涯」の成立と音楽的特徴



1896年、ミュンヘン宮廷歌劇場の指揮者となったシュトラウスは、翌97年にかけて、ヨーロッパ各地に演奏旅行をおこない、まことにはなばなしい活躍を示した。彼32才から33才にかけてのころである。交響詩をはじめとする作曲活動も活潑であり、96年の「ツァラトゥストラはこう語った」、翌97年の「ドン・キホーテ」が、その着実な創作活動の歩みを象徴している。ところで翌1898年、シュトラウスは、ミュンヘンを去って、北ドイツにむかう。ベルリン宮廷歌劇場の指揮者に就任したためであった。このころ、シュトラウスは、「ドン・キホーテ」につづく交響詩の作曲の構想を練っていた。1898年の8月2日にはじめられたこの交響詩は、ミュンヘンから持ちこした仕事であったが、彼は、この仕事を、1898年の暮も押し迫った12月27日に完成したのである。それが、交響詩のタイトルをもったものとしては最後の作品となった「英雄の生涯」だった。「ドン・キホーテ」が、前の年の12月29日に完成しているので、ちょうど1年ぶりだったわけである。この曲の初演は、作曲者自身の指揮で、翌1899年3年3日、フランクフルト・アム・マインの‘ムゼウムスコンツェルト’でおこなわれた。バイオリンの独奏を受けもったのは、ヴィリー・ヘスだった。この曲は、なお、各地で演奏されたことが記録されている。なお、この曲は、当事有数の指揮者であったウィレム・メンゲルベルクと、そして彼の指揮するアムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団に献呈されている。

さて、「英雄の生涯」にいたるシュトラウスの交響詩は、すべてなんらかの文芸作品ある時は詩、ある場合は古い物語、あるいは小説等によった標題をもっていた。ところが、「英雄の生涯」は、そうした他人の作品には、まったく関係がない。前述したように、シュトラウスは、みずからの生涯を、自分の芸術的生涯を、表現の対象としたからである。しかし、そうした新しい交響詩の作り方によって、彼は、今までの交響詩の創作活動を集大成し、新しい境地を拓いたのであった。ロマン・ロランは、シュトラウスがおそらく標題をみずから描いてみただろうとしながら、シュトラウスが直接ロランに語った言葉を紹介している。‘あなたはプログラムを読む必要はありません。ひとりの英雄がいて、敵と戦っていることを知っていただけさえすればよいのです’。このことから、ロランは、このことがどの程度正確かどうか知らないし、また、テキストなしにこの曲を追うものにとって、いくぶん難解な点が残るかどうか解らないとしながら、作曲家が語ったこの言葉は、彼が文学的な交響曲の危険性を理解し、彼が絶対音楽に近づいていることを示しているようだと語っている。

もちろん、こうした無標題性の主張のほかに、伝えられるところでは、シュトラウスは、この曲についてもプログラムを考えていたという説もある。曲が完成した直後、シュトラウスの弟子でワイマール歌劇場で彼の助手をつとめていたウィルヘルム・クラッテは、この作品のこまかい分析を公けにしたが、それは、師シュトラウスの考えにもとづいたものだという。その大要を記しておこう。〈曲は6つの主要な部分に分れる。第1部では、まず、‘英雄’の動機が確定したあと、もっと重要な主題的素材で、彼の性質や態度のいろいろな側面を特徴づけるものが、直ちに与えられる。それによって、‘英雄’は彼をとりまく世界と関係づけられる。つづいて、‘英雄’と、人類一般、賤しく嫉妬深い性質の人たちの間の対照がみられる。これは厳しくまばゆい色彩のコントラストにみちた一幅の絵であり、それに対して、和解させるような対の物として、魅惑的な情景がただちにつづき、そこでは、‘英雄’は愛を禁止されてあらわれる。武器をとれという命令がこの状態に終りを告げさせ、‘英雄’は、直ちに戦場に現われる。戦いは、栄光ある勝利によって終り、つづいて、知的な勇敢さの行為による試練の時期がつづく。高貴な思想と偉大な計画が熟し、

花咲く。内なる自然は平和に着実に発展をつづける。憎しみと官能にみちたこの世から、‘英雄’は、天啓をうけ、諦念にみちて、最後には‘自然’の静寂の中にしりぞく、戦いの、愛の、生のよろこびの憶い出が、彼の最後の日々の夢とまじりあう〉。

たしかに、「英雄の生涯」は、大きく六つの部分に区分できる。第1部は〈英雄 Der Held〉、第2部は〈英雄の敵 Des Helden Widersacher〉、第3部は〈英雄の伴侶 Des Helden Gefahrtin〉、第4部は〈英雄の戦い Des Helden Walstatt〉、第5部は〈英雄の平和な仕事 Des Helden Friedenswerke〉、そして第6部は〈英雄の隠遁と成就 Des Helden Weltflucht und Vollendung〉である。

最後に、この曲の音楽的特徴を整理しておこう。この作品は、かなりの長さをもった大作だが、合計六つの部分からなり、比較的容易に全体をとらえることができる。シュトラウスの交響詩では、従来の音楽形式が飛躍的に発展させられて用いられているが、「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら」でのロンド形式、「ドン・キホーテ」での変奏曲形式のかわりに、「英雄の生涯」では、きわめて自由に拡大し、変形されたソナタ形式が用いられている。このように自由なソナタ形式は、なお、つづく「家庭交響曲」や「アルプス交響曲」でも用いられるのである。大管弦楽の編成から、音色のゆたかさばかりでなく、和声的、対位法的な手法の自由さもみちびかれてくるが、この曲にみられる主題の彫琢された美しさも、大きな特徴といえるだろう。また、第5部では、シュトラウス自身がかつて作った交響詩の主題や音形などが数多く現われ、みごとに組み合わされている手法が注目されるが、これは英雄としての自己の業績をふりかえることを意味しているのである。

いずれにしても、この曲によって、シュトラウスは、大規模ながらきわめて明快な交響詩の完成を実現し、世紀末のもっとも典型的な記念碑を礎いたものといえよう。

注). 解説左下の各図版は、オスカー・ワイルドの戯曲「サロメ」にもとずき描かれたビアズレイの作品。

新交響楽団 第83回演奏会

日本の交響作品展シリーズ(その3)

《早坂文雄交響作品展》

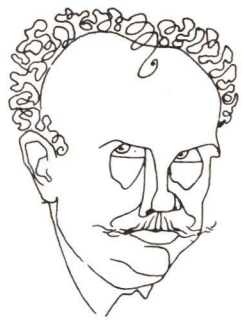
曲　　目　七人の侍　　古代の舞曲
　　左方の舞右方の舞　　管弦楽のための変容
指　　揮　芥川也寸志
日時・会場　1979年4月6日(金)午後7時
　　東京文化会館大ホール
企画　秋山邦晴・芥川也寸志
主催　新交響楽団　　後援　毎日新聞社

団員募集

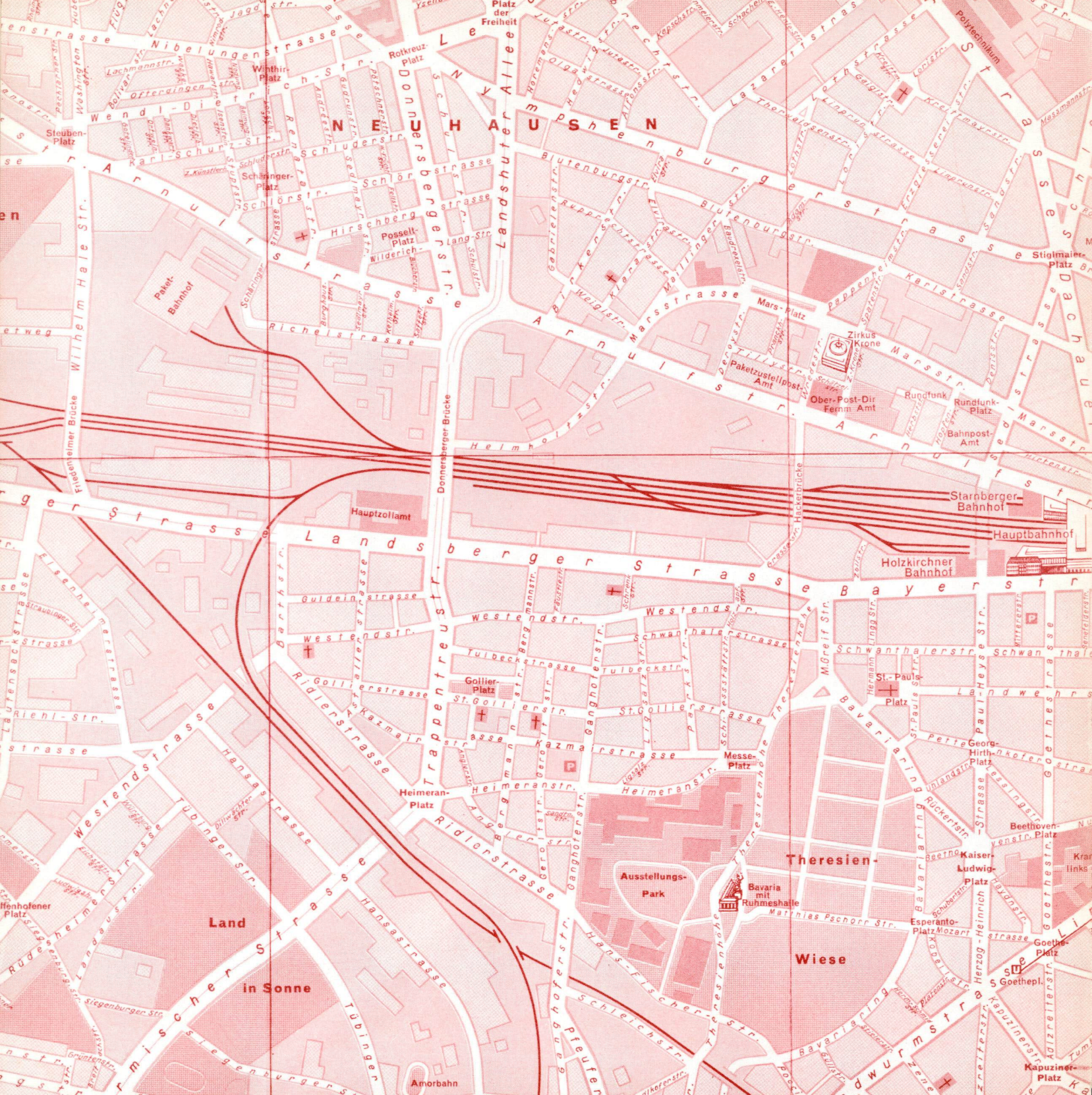
新交響楽団では、今、若いあなたの力を待っています。年4回の定期コンサート、年2回の団内演奏会など、決して楽しむだけの活動ではありませんが、オーケストラとして、常により良い演奏を目指しています。

今回は特に次のパートの増強を狙って募集します。[Vn, Vc, Fg, Tp, Hr, Tb] 簡単なオーディションあり。
連絡先: PM8：00～10：00

03-998-0118　井上
0474-63-8879　橋谷



RICHARD STRAUSS


NEUHAUSEN
Platz der Freiheit
Rotkreuz-Platz
Winthir-Platz
Steuben-Platz
Schlinger-Platz
Posselt-Platz
Wilderich-
Paket-Bahnhof
Mars-Platz
Zirkus Krone
Paketzustellpost-Amt
Ober-Post-Dir Femm Amt
Rundfunk
Rundfunk-Platz
Bahnpost-Amt
Stiglmaier-Platz
Hauptzollamt
Starnberger-Bahnhof
Hauptbahnhof
Holzkirchner Bahnhof
Gollier-Platz
Messe-Platz
Heimeran-Platz
St.-Pauls-Platz
Georg-Hirth-Platz
Beethoven-Platz
Kaiser-Ludwig-Platz
Esperanto-Platz
Goethe-Platz
Goethepl.
Kapuziner-Platz
Ausstellungs-Park
Bavaria mit Ruhmeshalle
Theresien-Wiese
Land in Sonne
Amorbahn
Nibelungenstrasse
Donnersberger Brücke
Landshuter Allee
Arnulfstrasse
Marsstrasse
Lazarettstrasse
Friedenheimer Brücke
Wilhelm Hale Str.
Landsberger Strasse
Trappentreustr.
Ridlerstrasse
Westendstrasse
Hansastrasse
Tübinger Str.
Bayerstr.
Schwanthalerstr.
Paul-Heyse Str.
Lindwurmstr.
Goethestrasse
Bavariaring
Theresienhöhe
Ganghoferstr.
Hackerbrücke
Heimeranstr.
Westendstr.
Tulbeckstrasse
St.Gollierstr.
Kazmairstrasse
Schwanthalerstrasse
Rückertstr.
Matthias Pschorr Str.
Mozartstrasse
Herzog-Heinrich-Str.
Kapuzinerstr.
Amorbahn